

特250

8

梵鐘講演資料

河崎顯了述

數化資料叢書 7



始





特250  
8



教化研究院  
指導

河崎顯了述

梵鐘講演資料

- 一、梵鐘文獻談 (資料)
- 二、梵鐘は出て征く (講演)

教化資料叢書 7





- 一、一派の教線に活動して居る人々の爲に、或は修養の資となるもの、或は教化の参考となるもの、或は布教の資料となるもの等を、順次に出版する。
- 一、各方面の大家にお願ひし、又は特殊の研究者にお願ひして、特定の題目について執筆を願ひ、或は講演、談話等を速記し筆記したるものを内容とする。
- 一、冊子は簡素を旨とし通讀に便なるを期して、體裁を一定し、教化資料叢書と名づけ、種類を分たず出版の順に従つて番號を附する。

教化研究院

## 梵鐘文獻談

河崎顯了述

今年の始め平常親交の友が來られて、君は昨今頻りに諸方で梵鐘供出に就いて講話をなさると云ふことを聞く、實は自分の寺も供出しましたが、それにつき門徒の者から色々尋ねられるが明確なる事を知らぬので甚だ困つてゐる、それで今日は君の調べられた資料に就いてゆつくり承りたいと存じて參つたと申される。その時私は、實に私も君と同様に門徒から尋ねられたのが動機となつて調べたのである。それは昨年の夏の始め門徒の老人方が數人訪ね來つて申すには「どうやらお寺の鐘も供出せねばならぬと云ふ話を諸方で聴きますが、是は數年前君からも訖度さうなるかも知れぬとのお話がありました、それが愈々本當と成りさうであります。どうか一度お鐘の由來に就いて詳しいお話をして下さい」と申し出られた。私はそれに對し、愈々さう成つたらお話ししようと約した。それが昨年の夏の始めであつた。

さてさう約束はしたものの、何を話すべきかと考へると、明確なる知識が無い。尤も私は少年の時分には朝晩の鐘を撞き、又法會の時の鐘も撞いたことはある。或は又出火や大水の時の早鐘、除夜の百八の鐘のこと、そんな事も知つてゐるが、それでは話にならぬ。はたと當惑し、是ではならぬと經釋諸文を涉獵し、初多の候に入つて略ぼその資料を取纏め終り、年末自坊の梵鐘供出法會にそれを參考として講演を爲して宿諾を果した。是がその資料の主控であります。固より梵鐘に關する資料は此の外にも多數あることならんと思ふ、是は私の乏しき藏書のみに就いて取調べたものであるので甚だ貧弱ではあるが、それで宜しければお話し申さんとて、主控を繰りつゝ以下の話をしたことであつた。



私は之を調べるに當り、最初に經典の中にそれを説かれたものがあるといふ問題を取上げて、その検討を始めた。往年閱讀の時の記憶で大體の見定めをつけ阿含部の諸經を精讀すると、『増一阿含經』の諸所に鐘の話が出てをる。中にも同經の第二十四(縮藏二)に、

是時尊者阿難聞此語已。歡喜踊躍。不能自勝。即昇講堂手執鍵椎並作是說。我今擊此如來信鼓。諸有如來弟子衆者盡當普集。爾時後說此偈。

降伏魔力怨 除結無有餘 露地擊鍵椎 比丘聞當集 諸欲聞法人 廣流生死海 聞此妙響音 盡當雲集此

是時尊者阿難此の語を聞き已り、歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず、即ち講堂に昇り手に鍵椎を執り並に是の説を作す。我れ今如來の信鼓を撃たん、あらゆる如來の弟子衆は當に普く集るべし。爾時復此の偈を説く。

魔力の怨みを降伏し、結を除きて餘りあることなし。露地に鍵椎を撃つ、比丘は聞かば當に集るべし。もろくの聞法人の生死海を度流せんと欲するものも、此の妙響音を聞かば、盡く當に此に雲集すべし。

是が『増一阿含經』に説かれたる最も詳しいものであり、鐘聲の功德が能く示されてある。殊に魔力の怨みを降伏すると云ふこと、又結を除きて餘りあることなしの句の意は十分詳説すべき要文であると感じ、私は此の偈を中心として詳説し來つてをる。本文の中の露地は屋外のこと。鍵椎は梵語で鐘又は磬と譯する。次に結は煩惱の

ことで、五結—貪・悲・慢・嫉・慳—。又五上分結—色愛・無色愛・掉・慢・無明—五下分結—貪・瞋・身見・戒取・疑—等と色々の解釋がある。詰りあらゆる煩惱の結びを解きて解脱せしめると云ふ意である。

次に梵鐘奉施の功德に就て『佛説爲首迦長者説業報差別經』(縮藏六)に次のやうなことが説かれてある。

若有衆生。奉施鐘鈴。得十種功德。一者得梵音聲。二者有大名聞。三者自識宿命。四者所有出言。人皆敬愛。五者常有寶蓋以自莊嚴。六者有妙瓔珞以爲服飾。七者面貌端嚴。見者歡喜。八者具大福報。九者命終生天。十者速證涅槃。是名奉施鐘鈴得十種功德。

若し衆生あり鐘鈴を施すれば十種の功德を得べし。一には梵音の聲を得る。二には大名聞あり。三には自ら宿命を識る。四にはあらゆる出言を人みな敬ひ受く。五には常に寶蓋あつて以て自ら莊嚴す。六には妙なる瓔珞ありて以て服飾と爲す。七には面貌端嚴にして見る者歡喜す。八には大福報を具す。九には命終して天に生ず。十には速に涅槃を證す。是を鐘鈴を奉施して十種の功德を得ると名づく。

又是と同様のことが『分別善惡應報經』(縮藏八)に次のやうに説かれてある。

若復有人於如來塔以鐘鈴布施。獲十種功德。何等爲十。一端嚴無比。二妙音適悅。三聲同迦陵。四言辭柔軟。五見皆歡喜。六得阿難多聞。七尊貴自在。八美名流布。九往來天宮。十究竟圓寂。如是功德。布施鐘鈴所獲勝報。



若し復人ありて如來の塔に於て鐘鈴を以て布施すれば、十種の功德を獲。何等を十と爲す。一つには端嚴比ひ無し。二には妙音適悅なり。三には聲は迦陵に同じ。四には言辭柔軟なり。五には見るもの皆歡喜す。六には阿難の如き多聞を得。七には尊貴自在なり。八には美名流布す。九には天宮に往來す。十には圓寂を究竟す。是の如き。功德は鐘鈴を布施するもの、獲る所の勝報なり。

此の中迦陵は梵語で、美聲鳥又は美音鳥とも譯してある。

以上は經典を精讀して讀みあたつた要文である、此の外他の阿含部の諸經の中に尙幾多の類文があること、思ふも、それを検討せんとすると多數の日時を要し、今の私にはその餘暇を有し無いので經典の検討は是に止めて、次に諸家の經釋の諸書に目を通すことにした。それに就いても得る所があつたので、それをお話し申さう。

## 二

私が最初に讀んだのは『勅修百文清規』(縮)で、その卷第八に次の一節があつた。

大鐘叢林號令資始也。曉擊則破長夜警睡眠。暮擊則覺昏衢疎冥昧。引杵宜緩揚聲欲長。凡三通各三十六下。總一百八下。起止三下稍緊。鳴鐘行者想念偈云。願此鐘聲起法界。鐵圍幽暗悉皆聞。聞塵清淨證圓通。一切衆生成正覺。仍稱觀世音菩薩名號。隨號控擊其利甚大。

大鐘は叢林の號令の資始なり。曉に擊つは則ち長夜を破り睡眠を警しむ、暮に擊つは昏衢を覺まし冥昧を疎す

ためなり。杵を引くは宜しく緩かにし聲を擧げて長からしめんを欲す。凡そ三通し各三十六下す、總じて一百八下す、起止の三下は稍緊しくす。鳴鐘の行者は偈を想念して云ふ。願くは此の鐘聲は法界を起へん、鐵圍幽暗にも悉く聞えん、聞くもの塵を清淨にして圓通を證せん。仍觀世音菩薩の名號を稱し、號に隨うて控擊すればその利甚大なり。

本文の中、叢林は禪刹の別名、印度では郊外の閑寂の林地を選びて精舍を作つた。それで比丘の止住處に此の名稱が用ゐらるゝことゝなつた。是に就て僧伽は大樹の叢生するに喩へたものとか、又は衆僧は勝智の叢林であるとかとの説明をしてをる方もある。起。止。三。下。は撞き始めと撞きおさめの三つの打ちおろしのこと。鐵。圍。は須彌山説に出てをる山の名で、須彌山の最下を風輪となし、その上を水輪とし、尙その上を金輪即ち地軸となし、その上に九山八海がある。即ち持雙・持軸・擔木・善見・馬耳・象鼻・持邊・須彌の八山八海と鐵圍山にしてその中心は須彌山なり。此の鐵圍山のことである。幽。暗。は地獄のこと。即ち之で迷界の總てを顯はしたるものである。次の聞。塵。の塵は煩惱の異名にして、之では五欲の煩惱のことである。

私は本文を讀んで除夜の鐘のことを知つたのみならず、鐘を撞くに當つての心得につき大なる教訓を得たことを欣び、此の點に就て詳説したことであつた。尤も此の事は禪家の方は疾くに承知のことであるが、私は今日まで此の書を読まなかつたため今更に注意を喚起し、それと同時に私はもつと／＼廣く經釋の諸文を讀破しなければならぬことを痛感したことであつた。尙此の鐘を撞くに當つての心得を『四分律刪繁補闕行事鈔』卷上(大正藏)第四十卷に次のやうな注意が擧げてある。



初欲鳴時。當依經論建心標爲必有感徵。應至鐘所禮三寶訖具儀立念。我鳴此鐘者爲召十六僧衆。有得聞者並皆雲集共同和利。又諸有惡趣受苦衆生令得停息。

初めて鳴さんと欲する時、まさに經論に依つて心標を立て、爲さば必ず感徵あらん。まさに鐘所に至らば三寶を禮し訖りて儀を具へ念を立てよ。我れ此の鐘を鳴らすは十方僧衆を召さんがためなり。聞くことを得る者は並に皆雲集し共同和利せしめん。又もろくの惡趣にありて苦を受くる衆生は停息を得しめん。

此の外『諸經要集』第二十(大正藏)に斯うしたことが説かれてある。

又増一阿含經云。若打鐘時。願一切惡道諸苦並皆停止。若聞鐘聲兼說偈讚。除得五百億劫生死重罪。

降伏魔力怨 除結盡無餘 露地擊搥椎 比丘聞當集二諸欲聞法人 度流生死海 聞此妙響音 善當來集此

又雜經說偈云

聞鐘臥不起 護塔善神瞋 現在緣果薄 來報受蛇身 所在聞鐘聲 臥者必須起 合掌發善心 賢聖皆歡喜  
洪鐘震響覺群生 聲遍十方無量土 含識群生普聞 拔除衆生長夜苦 六識常昏終夜苦 無明被覆久迷情  
晝夜聞鐘開覺悟 怡神淨利得神通

又増一阿含經に云く。若し鐘を打つ時には、願くは一切の惡道のもろくの苦しきは並に皆停止せん。若し鐘聲に兼ねて偈讚を説くを聞かば、五百億劫の生死の重罪を除き得ん。

魔力の怨みを降伏し、結を除き盡くして餘す無し。露地に搥椎を撃つ、比丘は聞かば當に集るべし。もろくの聞法人の生死海を度流せんと欲するものも、此の妙響音を聞かば、善く當に來つて此に集るべし。

又雜經說偈に云く。

鐘を聞くも臥して起きざれば、護塔の善神は瞋る。現在に緣果は薄く、來報には蛇身を受く。所在鐘聲を聞かば、臥する者は必ずすべからく起くべし。合掌して善心を發せば、賢聖は皆歡喜せん。

洪鐘の響は群生を覺す、聲は十方無量土に遍く、含識の群生は普く聞き、衆生の長夜の苦を拔除せん。六識常に昏くして終夜苦しむ、無明に覆はれて久しく迷情す。晝夜鐘を聞いて覺悟を開き、神を淨利に怡ばしめて神通を得ん。

此の中には別に難句は無い、若し強ひて拾ふと來報とあるは來世の果報、含識は魂ある者のこと。その外前の『阿含經』の偈では除結無有餘とあるのが除結盡無餘となり、盡當雲集此が善當來集此となつてをるが、その意味とは變りはない。私は前の阿含の偈以外に此の諸偈を読み亦大に得る所があつた。以上で大體鐘の功德の如何なるものか判つたが、尙是に因み次の説明も注意せねばならぬことである。即ち前にあけた『行事鈔』下卷に、若下明將死打磬。令聞生善。天台智者。臨終語維那曰。人命將終得聞鐘磬。增其正念。唯長唯久氣盡爲期。云

何身冷方聲磬耶(今時死已。方打故知無益)

若し下に明すが如く、將に死せんとするとき磬を打ち、聞く善を生ぜしめよ。天台の智者臨終に維那に語つて曰く、人命將に終らんとし鐘磬を聞くことを得ば、その正念を増さん。唯長く唯久しく氣盡るを期と爲す。云何



となれば身冷へて方に聲磬ならんや。(今時死し已り、方に打つ故に益無きを知る)

『釋氏要覽』(大正藏)第五十四卷に此の臨終の時の磬を打つのを無常磬を打つと名け、又臨終の時の精神状態を命終心と云つて、次の説明が試みられてあるで、之も知つておく必要がある。

打無常磬 增輝記云。未終時長打磬。令其聞聲。發其善思。得生善處。智者大師臨終時。語維那曰。人命終時得聞磬聲增其正念。惟長惟久。勿令聲絕。以氣盡爲期。

無常磬を打つ。增輝記に云く、未だ終らざるの時長く磬を打ち、それをして聲を聞かしめば、その善思を發し善處に生ぜしむ。智者大師臨終の時維那に語りて曰く、人、命終の時磬聲を聞くことを得ばその正念を増さんこれ長くこれ久しくし聲を絶たしむる勿れ、氣の盡くるを以て期となす。

此の中の維那とあるのは、或は都維那とも云ふ、僧衆の雜事を司り及び之を指授する者である。古來大寺院には上座・寺主・都維那の三者があつて住僧を統御した。この維那と云ふ語は梵語と漢語の合成で、維ほ網維の義那は梵語の羯摩那で授事と譯する。それから同書の命終心の説明は次の通りである。

命終心。唯識鈔云。命終心起四種愛。即一切有情善惡。受身之根本也。一者於其身。起現有愛。二者於現眷屬起貪喜俱行愛。三者於現田宅資生業。起彼彼喜樂愛。四者於當來生。起後有愛。且四愛中。前三是助潤生。後一是正潤生。謂於當來生地起故。亦名受生心。此心位。若得人善巧策發。聞佛名磬聲。令專繫聖境。以不顛倒故。必隨願往生善趣。

命終心。唯識鈔に云く。命終心には四種の愛を起す、即ち一切有情の善惡受身の根本なり。一にはその自身に於て現有愛を起す。二には現眷屬に於て貪喜して、俱行愛を起す。三には現田宅資生の業に於て彼々に喜樂愛を起す。四には當來生に於て後有愛を起す。且つ四愛の中前三は生を助け潤し、後の一は是は正しく生を潤す謂ふこと、ろは當來の生地に於て起すが故なり、亦受生心とも名づく。此の心位に若し人善巧策發を得て、佛名磬聲を聞き、専ら聖境に繫がしむれば、顛倒せざるを以ての故に、必ず願ひに隨うて善趣に往生せん。

私は是等の諸文に依つて今日でも臨終の枕元で響銅を打つのは斯うした教へから出たものであることを知ると同時に、その打ち方に就いて注意せねばならぬことを知り、大變な徳を得た。それから次の命終心の四種愛のこととは私も是迄能く話したことであつたが、それが又磬鐘の聲に依つて善趣に生ずる因縁を得ると云ふことを確かめ、是亦大變な徳を得たのである。

次に鐘聲を聞き惡趣に居る者が苦惱を免れたと云ふ因縁談が諸書に記されてあるで、それも摘録しておいた。

三

是に就ては色々の物語がある、『佛祖統記』第四十二(大正藏)第四十九卷に次の物語が出てをる。

三年。金陵上元縣人暴死。誤追入冥府。見唐先主被五木甚嚴。民大駭問。主何以如此。主曰。吾爲宗齊丘所誤。殺和州降者千人。以冤被訴。民曰。臣誤追當還。主泣曰。吾囚此。聞鐘聲則苦暫息。汝歸語嗣君。凡寺院



鳴鐘令延緩之。更能爲造一鐘。尤爲濟苦。民曰。下人何以爲驗。主曰。吾曾受于闐瑞玉大王。於瓦官寺佛左膝以香泥藏之。時無知者。民既還而白後主。親詣瓦官剖膝。果得玉像。感泣慟憐即造一鐘於清涼寺。鑄其上云。薦烈祖孝高帝脫幽出厄。以玉像建塔蔣山。

三年。金陵上元縣人暴かに死し、誤り追はれて冥府に入り、唐の先主が五木を被ること甚だ嚴なるを見る。民大に駭き問ふ、主何を以ての故に此の如きかと。主曰く。吾れ宗齊丘のために誤られ和州の降者千人を殺す、冤を以て訴へられたるがためなり。民曰く。臣誤つて追はるまさに還るべし。主泣きて曰く。吾れ此に囚はれ鐘聲を聞けば則ち苦しむ暫く息む、汝歸らば嗣君に語れ、凡そ寺院の鳴鐘は之を延べ緩かならしめよ、更に能くために一鐘を造らば尤も濟苦を爲さん。民曰く。下人何を以て驗と爲さん。主曰く。吾れ曾て于闐瑞玉を大王に受け、瓦官寺の佛の左膝に香泥を以て之を藏む、時に知る者なし。民既に還りて後主に白す。親しく瓦官に詣で膝を剖く、果して玉像を得、感泣慟憐し即ち一鐘を清涼寺に造り、その上に鑄て曰く。烈祖孝高帝の幽を脱し、厄を出んがために薦むと。玉像を以て塔を蔣山に建つ。

此の物語は『百丈清規』にも出てをる。此の文中の三年は開運三年である。五木は首枷・手枷・足枷等の五體を檢束する刑具である。それから慟憐の憐は辨の誤りならんかと思ふ、辨は胸を打つことで、悲しみ嘆きて胸を打つことである。それから又『續高僧傳』第二十九(縮藏)に次の物語が出てをる。

釋智興。俗緣宋氏。洛州人也。謙約爲務。勵行堅明。誦諸經數十卷並行法要偈數千行。心口相師不輟昏曉。住

禪定寺。今所謂大莊嚴也。初依首律師隨從講會。思力清徹同侶高之。微難隣錯詞鋒驚挺。又能流靡巧便不傷倫次。時以其行無諍也。大業五年仲冬。次掌維那。時鐘所役奉佩動至僧徒無擾。寺僧三果者。有兄從帝南幸江都。中路病沒。初無凶告。忽通夢其妻曰。吾行從達於彭城。不幸病死。生於地獄。備經五苦。辛酸巨言。誰知吾者。賴以今月初日蒙禪定寺僧智興鳴鐘發聲響振地獄。同受苦者一時解脫。今生樂處思報真恩。可具絹十疋奉之并陳吾意。從睡驚覺怪夢所由。興人共說。初無信者。尋又重夢。及諸巫覡咸陳前說。經十餘日凶問奄至。恰與夢同。果乃奉絹興之。而興自陳無德。並施大衆。有問興曰。何緣鳴鐘乃感斯應。興曰。餘無他術。見付法藏傳闍跢王餽輪停事。及增一阿舍經鐘聲功德。敬遵此轍。苦力行之。每冬登樓寒風切肉。僧給皮袖用執鐘槌。餘自勵意露手捉之。嚴冬裂肉掌中凝血。不以爲辭。又諸時鳴鐘之始。願諸賢聖同入道場。然後三下。將欲長打如先致敬。願諸惡趣聞此鐘聲俱時離苦。如斯願行志常奉修。豈惟微誠速能感。衆服其言。以貞觀六年三月避疾少時自知後世。捨緣身資召諸師友。因食陳別。尋卒莊嚴。春秋四十有五。葬杜城窟中。弟子善因。宗師戒範講四分律。講法華經冥神福慧著聞京邑。

釋の智興は俗緣宋氏洛州の人なり。謙約務を成し勵行堅明、諸經數十卷並に行法要偈數千行を誦す。心口相師ひ昏曉を輟めず。禪定寺に住す今の所謂大莊嚴なり。初め首律師に依り講會に隨從す、思力清徹同侶之を高しとす。難を隣錯に微かにし詞鋒驚くべく挺んず。又能く流靡巧便するも倫次を傷はず、時にその行ひを以て諍ふこと無し。大業五年仲冬、次で維那を掌る、時に鐘はその役とする所なれば奉佩動至し僧徒擾ることなし。寺僧の果なる者に兄ありて帝に從ふて江都に幸きし中路にて亡沒す。始め凶告無し、急ち夢をその妻に通じて



曰く、吾れ行に従ひ彭城に達し不幸病死し地獄に生れ備に五苦を経、辛酸言ひがたし、誰か吾れを知る者ぞ。頼たのに今月初日を以て禪定寺の僧智興鐘を鳴らし發聲の響き地獄に振ふを蒙り、同じく苦しみを受ける者一時に解脱し、今は樂處に生ず。その恩を報ぜんと思ふ、絹十疋を具し之を奉じて吾が意を陳すべし。睡より驚き覺めて夢の由る所を怪み、人と共に説くも初めは信する者なし。尋で又重ねて夢を見る、及び諸の巫覡にも前説を陳ぶ。十餘日を経て凶問奄たふち至る、恰も夢と同じ、果乃ついにち絹を奉じて之を與ふ。しかるに興は自ら徳無きを陳べ並に大衆に施す。興に問ふものありて曰く、何の緣にて鳴鐘乃ちこの應を感ずと。興曰く、余他の術なし付法藏傳の鬲はくじ吒王の劍輪事及び増一阿舍經の鐘聲の功德の事を見、此の轍を敬遵し苦力之を行ふ。毎冬櫻に登ると寒風肉を切る、楡は皮袖を給して用て鐘槌を執らしむも、余は自ら意を厲まし露手之を捉る、嚴寒肉を裂き掌中血を凝らすも以て辭と爲さず。又諸時鳴鐘の始めに至り、諸の賢聖道場に入り給はんことを願ひ、然る後三下す。はたまた長打を欲する時は、諸の惡趣のもの此の鐘聲を聞かば俱時に苦を離れんことを願ふ。斯の如きの願行の志を常に奉修す、豈惟るに微誠能く遠く感ずるためならんか。衆その言に服す。貞觀六年三月を以て病に遭ひ少時にして後世を知り、緣身の資を捨て諸師友を召き、食に因て別を陳べ、尋で莊殿に卒す、春秋四十有五、杜城の窟中に葬る。弟子善因、宗師戒範四分律を講じ、法華經を講す。冥神福慧京邑に著聞す。

本文の中、大莊殿は大莊嚴寺のこと。微難鑿錯詞鋒擬は經釋の文中魚鱗の錯綜したるが如き難句を詞鋭く解説すること。流靡巧便不傷倫次は時に諧謔じゆうたんを交へて奔放なる談議を爲すももそれがために身分の次第をみだすやうなことは無いとの意である。私は本文の後半に説かれた智興師の鐘を撞く態度につき深き感銘を興へられ、私共も斯う無くてはならぬと反省せしめられたのである。それから本文中の付法藏傳の談であるが、是は「付法藏傳」(大正藏第五十卷)に次の事柄が記してある。

鬲はくじ吒王所乘之馬。於路遊行足自推屈。王語之曰。我征三海悉已歸化。唯有北海未來降伏。得之者不復相乘。吾事未辨如何便爾。爾時群臣聞王此語。咸共議曰。鬲はくじ吒王貪虐無逆。數出征伐勞役人民。不知厭足欲王四海皮備邊遠親戚分離。若斯之苦何時寧息。宜可同心共屏除之。然後我等乃當快樂。因王病瘵以被鎖之。人坐其上須臾氣絕。由聽馬鳴說法緣故。生大海中作千頭魚。劍輪廻注斬截其首。續復尋生次第更新。如是展轉乃至無量。須臾之間頭滿大海。時有羅漢爲僧維那。王即白曰。今此劍輪聞捷推音即便停止。於其中間苦痛小息。唯願大德垂哀矜愍。若鳴捷推延令長久。羅漢愍念爲長打之。過七日已受苦便畢。而此寺上因彼王故。次第相傳長打捷推。至於今日猶故如本。

鬲はくじ吒王乘る所の馬、路の遊行に於て足自ら推屈す。王之に語つて曰く、我れ三海を征し悉く已に歸化す、唯北海の未だ來つて降伏せざるあり、もしこれを得ば復相乘らす、吾が事未だ辨ぜざるに如何ぞすなはつ爾と爾時群臣王の此の語を聞き、咸共に議して曰く、鬲はくじ吒王貪虐無道にしてしばし出で、征伐し、人民を勞役し、厭足を知らず、四海に王たらんと欲す、邊遠皮備のために親戚は分離す。若しかくの如きの苦何れの時にか寧息せん、宜しく同心し共に之を屏除すべし、然る後我等乃ちまさに快樂なるべし。王の瘵を病むにより破を以て之を鎖め、人その上に坐す、須臾にして氣絶す。馬鳴の説法を聽ける緣の故に、大海中に生れ千頭の魚



を作る、劍輪廻注してその首を斬る。續いて復尋ぎ生じ次第に更に斬る。是の如く展轉乃至無量、須臾の間に頭は大海に滿つ。時に羅漢あり僧の維那となる。王即ち白して曰く、今此の劍輪槌椎の音を聞くとすなはち停止す、その中間に於て苦痛小息す。唯願くは大徳哀矜愍を垂れ、若し槌椎を鳴さば延べて長久ならしめ給へ。羅漢愍念し、ために之を長打す。七日を過ぎ已り受苦すなはち畢る。而して此の寺上の彼の王の因の故に、次第に相傳へ槌椎を長打し、今日に至るも猶故に本の如し。

本文中に由。馬鳴說法緣故とあるは、王が在世の當時嘗て馬鳴大徳の説法を聽いてそれに隨喜したことがあつた、その因縁に由て地獄に墮ちずして大海の魚に生を享けられたことを云ふのである。是で智興の述べられた爾呢吒王の劍輪の故事は解せられる。

私は以上の經緯の諸文で大體梵鐘の由來を知ることが出來たので、是位の所でその取調を止めようと思つたのであつたが、その時不圖思ひ浮んだのは青年時に讀んだ『平家物語』の「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響き有、沙羅雙樹の花の色、生者必衰の理をあらはす、奢れる者も久しからず、唯春の夜の夢の如し」の句である、私は是迄それをば單に名文であるとして口ずさみ來つて別に不審を抱かなかつたが、斯うして鐘の事を檢べると、此の祇園精舎の鐘の聲に就てもその典據が知りたくなり、それを檢べてみると、『中天竺舍衛國祇洹寺圖經』(大正藏第四十五卷)に次の事が説かれてあつた。

次西第六名天童院。諸天童子常有三百爲供。佛故止此院中。大院西巷門西自分六院。南第一院開於三門。西塞名無常院。中有一堂但以白銀。四面白廊白華充滿。畫白骨狀無處不有所欲諸無常。皆舉至此令見白骨諸非常相

既命終已。從南門出西大牆之西門。一切無常皆由此路。院有八鐘。四白銀四銅梨。銀鐘在院四角。起臺置之。

銅梨鐘者在無常院四隅。銀鐘四口各重十萬斤形如須彌。九龍盤繞鐘鼻在臺上仰。銀蓮葉中一一鐘邊、一白銀人戴天冠。摩尼寶王在頂上。高一丈二尺手執銀槌。比丘將逝。四角銀人一時打鐘。音中所說諸佛涅槃法。他化天人聞此鐘。天童將白華幡來。下供養比丘死屍。兜率諸天便持天中十六種花下投院中。是病比丘聞於鐘聲。不失本心得生善道。其銅梨鐘形如腰鼓。鼻有一金昆侖。乘金師子手拂白拂。病僧將大漸。貴金昆侖口說無常苦空無我。手舉白拂鐘即自鳴。音中亦說諸行無常置生滅法。生滅滅已寂滅爲樂。病僧聞音苦惱即除得清淨樂。如入三禪垂生淨土。

次に西の第六を天童院と名づく、諸天の童子常に三百ありて供へものを爲す。佛故に此の院中に止る。大院西巷門の西自ら六院に分かる。南第一院三門を開く、西は塞がり無常院と名づく。中に一堂あり但し白銀を以てす、四面の白廊に白華充滿す、白骨の狀を畫き處としてあらざるなし。もろくの無常を欲するものは皆舉つて此に至つて白骨のもろくの非常相を見せしむ。既に命終し已れば南門より西の大牆の西門を出づ。一切の無常は皆此の路に由る。院に八鐘あり、四は白銀にして四は銅梨なり。銀鐘は院の四角にあり、臺を起して之を置く。銅梨鐘は無常院の四隅にあり。銀鐘四口各重十萬斤、形は須彌の如し、九龍壇を盤繞り鐘鼻は臺上にあつて仰ぐ。銀蓮華の中一一の鐘邊に一白銀人あつて天冠を戴き、摩尼寶王頂上にあり、高さ一丈二尺、手に銀槌を執る。比丘將に逝かんとすると、四角の銀人一時に鐘を打つ、音中に諸佛入涅槃法を説く。他化天人此



の鐘を聞くと、天童は白華の幡をもち來り、下つて比丘の死屍に供養す。兜率の諸天はすなはち天中の十六種の花を持ち下りて院中に投ず。是病比丘は鐘聲を聞き本心を失はず善道に生ず。その頗梨鐘は形腰鼓の如し、鼻に一金毘侖あり金師子に乗り手に白拂を拂ふ。病僧將に大漸ならんとすると、この金毘侖口に無常苦空無我を説き、手の白拂を擧ぐると鐘は自ら鳴る。音中に亦諸行無常是生滅法、生滅滅已寂滅爲樂を説く。病僧音を聞くと苦惱は即ち除かれ清淨樂を得、三禪に入るが如く淨土に垂生す。

本文の中の頗梨は梵語で水精と譯す。金毘侖も梵語であると思ふもその譯語は見當らぬ、多分諸天の中のものならんかと思ふ。その他には別に難句はない。私は此の一文を讀み『平家物語』の文の典據を知ることが出來て満足したことであつた。

## 四

經釋の諸書の中には此の外にも幾多の鐘に関する参考文はある、殊に『四分律行事鈔』には色々詳細の説明があるも一般の方々に向つて説くには餘りに専門に渡りその必要を認め無いで略することゝした。所が少年時に聞き覚えてゐた曉六ツの鐘のこと、是は今でも老人方の中で時折り話されるで、之も一つ調べてみたい。又除夜の百八の鐘は百八煩惱の數だと云ふことを聽かされてをうたつたで、此度の文獻考には大した必要を認めないもそれらも一應取調べてみたい。

曉六ツの鐘は多分「六時の鐘」のことであらうと思ふ。古曆では一晝夜を十二時間に分ち是に十二支を配當す。

即ち今日の午前零時が子の刻で此の時刻に鐘を九ツ打ち、二時は丑の刻で八ツ、四時は寅の刻で七ツ、六時は卯の刻で六ツ、八時は辰の刻で五ツ、十時は巳の刻で四ツ、斯く九ツから次第に減して四ツと成り、再び九ツに還るのである。此の六時鐘は古來から天王寺と高野山で鳴らされたとのことである。是で曉六ツの鐘のことは判つた。それから除夜の百八の鐘を百八煩惱の數に該當せしめたものであることは今の所その典據は見當らぬ、それよりもそれは俗説であつて、本當は支那の十二月、二十四氣、七十二候を合はした數に基いたものであるとの説がある。此の七十二候と云ふのは五日を一候とし、三候を一氣とし、六候を一日とし、七十二候を一年とする。二十四氣は十五日を一氣とし、二氣を一日とし、二十四氣を一年とするのである。私は此の事は別に大した問題とせず、前に述べた『百丈清規』の説明で満足してをる。彼の書では數の説明はしてないがその撞き方は丁寧な説かれてある。即ち撞き始めと撞き終りの三下は緊く力を入れる、一回に三十六撞き、孰れも緩かに撞いて餘音を長からしめ、それを三回繰返して百八聲とするのである。此の撞き方は心得ておかねばならぬ。最後に我が一派の鐘の撞き方を申すと、我が一派では晨朝十一、日中九ツ、追夜七ツ、集會は十八、一座法要は九ツ撞くことに定まつてをる。

私は此度の梵鐘に関する取調は是で終了することゝした。尤も此の外鐘の種類、その銘文、又鐘供養、鐘の撞き始めの儀式等事細かに説かれてあり、その資料も大略蒐集したが、差當り今次の講演にはその必要を感じないでそれらの記述は他日に譲り、今回は前上の諸資料に基きて數回の講演を試みた。その中の一つの「梵鐘は出て征く」との主題とともに前後二席に分ち、約二時間半に亘つて談じた講演を次に附載致すことゝする。



## 梵鐘は出て征く

### 前席

私が數年前から鐘かねでは寺の鐘も供出せねばならぬかも知れぬと申したことが、愈々實現せられ、今日は皆さんと共にその供出法要を營み、永年親しみ來つた鐘を供出して此の大東亞戰爭に關し應分の御用を爲さしめることゝ成つた。何んだか可愛い息子を戰場へ送り出すやうな氣がして心が勇み立つのであります。所で又長い間朝晩聞き慣れ來つた此の鐘の聲が今日限り永久に聽かれぬことゝ成ると思ふと、何んとなく心淋しい氣もする。併しそんな感傷的な事は今は申すべきでない、勇ましく送り出さねばならぬ。さりとて一言も所感を申さずして鐵瓶や火鉢のやうな手廻りの物を出すやうな心で送り出す氣にもなれぬで、是から何故に寺院に鐘が必要であつたのか、又何故に之を供出しなければならぬかと云ふことに就いて詳しく申述べて、皆さん方のお聽きを願ふことゝする。

實を申すと、私は是まで此の鐘の事に就て別に改まつて檢べたことも無く、唯少年の時から朝晩之を撞き來つたのであり、それも近年は中止してたゞ法會の時に撞くのみとしてをつたに過ぎ無かつたのである。所で今度愈々之を供出すると云ふことに成つたので、かねて二三の方から鐘の由來を話して呉れと申出され、それが動機と成つてその由來を檢べる氣に成りまして、それを始めて見ると、仲々大切な法器であると云ふことが判り、こん



なこならもつと早くにそれを話すべきであつたのに、と今更申譯が無かつたと恥ぢ入つてをるやうな次第であります。今日はその罪亡ほしと、又一つは今日是を供出するにつき、鐘に對して永年御法義のお引立に就て力を盡して呉れたお禮を申すと云ふ意を表示せんと欲して此のお話をするのでありますから、何うか私の意のある所を汲んでお聴きを願ひたいのであります。

一體、此の鐘を寺院に備付ける事に成つたのは、いつ頃から始まつたのであるかと申すと、是は大聖釋尊の時から大切な役目を有する法器として取扱はれてをつたのであります。『増一阿含經』と申すお經の中に阿難尊者が鐘の事につき、「われ今此の如來の信鼓を撃たん、如來の弟子衆は盡く集るべし」と云うて、

降伏魔力怨 除結無有餘 露地擊捷椎 比丘聞當集 諸欲聞法人 度流生死海 聞此妙響音 盡當雲集此

と云ふ偈文を唱へたことが説かれてある。此の偈文の始めの二句は大變なる事が述べられてある。即ち照魔の怨みの力を降伏せしめて暴威を振ふことが出来なくならしめ、又結と云ふてお互を縛りつけて淨土へ行かしめぬ煩惱の縛りの綱を一條も遺さずほどくとのことを述べ、それから次下の句の露地と云ふて屋外で捷椎を撃つ、捷椎は鐘のことで即ち鐘を打つたら比丘と云つて佛道の修行者は集り來れ、その他佛の教を聞きて生死苦海を渡つて涅槃の都へ入らんと欲する者も、此の妙なる響きのする鐘の音聲を聞かば盡く雲の如く集り來れと云ふのが此の偈文の大意であります。即ち此偈は鐘の音聲には惡魔が退散し、煩惱の繫縛が解けて生死海を渡る大事因縁があることを力強く説かれたものであります。此の外同經に鐘を撞くと一切の惡道に沈んで苦しんでをる者が、一時その苦しみから、免れると云ふことが説かれてあります。私は是迄鐘を撞くのは法座を開く知らせのみと思つて

をつたに、此の經文を読み、それも一つの役目ではあるが、それと共に此の鐘の音聲に依つて惡魔が追拂はれ、煩惱の縛りが解け、そのみならずもろくの惡道に沈める者がその苦しみを免ると云ふ偉大な徳があると云ふことを知つて、今更に尊く感ずると共に今日迄その事を只の一度も皆さん方にお話し申さなかつたことを誠に申譯が無かつたと恐懼するのであります。

お經の上のお話はまだく澤山ありますが、それは略することとして、次に支那の大徳方が鐘に就いて説かれてをる事をお話申します。德輝禪師は曉方の鐘は長夜の夢を破つて睡眠をさまし、暮方の鐘は終日の勤勞に心が暗んだ者に警覺を與へてそれを反省せしむるものである。さうした大切な役目を有するものであるから廉略に撞いてはならぬ、それを撞くに當つては緩かに撞木を引き、その音聲を長く響くやうに心掛けねばならぬ、その數は三十六を三回繰返し總計一百八を撞く、そして撞き始めと撞き終りの三は稍力を込めて緊しく撞かねばならぬ。尙鐘を撞く時には心の中に

願此鐘聲超法界 鐵圍幽暗悉皆聞 聞塵清淨證圓通 一切衆生成正覺

と云ふ偈を念じ、觀世音菩薩の名號を稱へて撞くと、その利益は甚大であると説かれてをる。

此の偈文の大意は斯うである。願くは此の鐘の音聲は法界と云うてあらゆる世界へ響き渡り、鐵圍山と云つて是は少々むつかしいが須彌山説で説かれてある須彌世界の最後の外廓を爲してをる山のこと、世界のはてまでの意を示したもの、幽暗は暗い地獄の底と云ふこと、さうした所に居る者にも聴き取られんことを願ふ。そして此の鐘の聲を聞く者は煩惱の塵を拂ふて、こだわりの無い圓通の徳を證り、それに依つて一切衆生に正覺と云



うて佛の證りを成就せしめんことを願ふと云ふのである。私は若い時には朝晩の鐘を撞き、又除夜の百八の鐘も撞いたが、斯うした心掛けて撞かねばならぬと云ふことを今度始めて知つたのである。誠にお恥かしいことである。

是は大鐘のことでは無いが道宣師は又斯うしたことを云はれてをる。

人の臨終の時には鐘を打たねばならぬ天台の智者大師の云はれたことに人が臨終の時に鐘の聲を聞くと正念を増す功德があるで、それを打つのは長く久しく打ち、命が終つた時にそれを止めよと云はれたことがある、所が今日の人々は命が終つてから打つからその利益がない、之は注意しなければならぬと説かれてをる。私は之を讀んで、私共が、今日でも臨終の枕元で響銅を打つのは此の教から來たものであり、私共はその心掛けて打たねばならぬと云ふことを知りました。

それから少年の時分から聞き覚えてをつた曉け六ツの鐘のこと、是は私共のやうな老人仲間では今でも云ふことがある、此の時の鐘は六時鐘と云ふて、昔は一晝夜を十二時間に區分して之に十二支を配當したのである。そしてその時刻毎に鐘を撞いて時を知らした。その撞く數は午前零時の子の刻に九ツ、次の二時の丑の刻に八ツ、四時の寅の刻に七ツ、六時の卯の刻に六ツ、之が曉け六ツの鐘である。それから次の八時の辰の刻に五ツ、十時の未の刻に四ツ、最後の午の刻に元に戻つて九ツ撞いた。こんな事は別に話すにも及ばぬが若い方は知らないから一寸申添へたのである。それよりも私が深き興味を感じたのは、あの『平家物語』の有名な「祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響き有、沙羅雙樹の花の色、生者必衰の理をあらはす、奢れる者も久しからず、唯春の夜の夢の如

し。」と云ふ有名な一章、是は私は少年の時分から唯何んともなく有名の文章であると感じて口にし來たつてをつたのであるが、今度はその典據を検べて見て、始めてその眞意を知つたのであります。

此の祇園精舎の鐘のことは道宗師が詳しく説かれてをり、それに依ると祇園精舎の無常院と云ふ堂の四隅に水精の鐘があつて病僧が臨終の時々その水精の鐘から「諸行無常是生滅法、生滅滅已寂滅爲樂」といふ音聲を發する、病僧はその音聲を聞くと、苦惱を除いて清淨樂を得て淨土に往生すると云ふことが説かれてある、是が「平家物語」の有名な句の出據と成つてをることを知つたのである。所で此の諸行無常の四句は佛敎の根本原理を説かれたもので、之を詳しく説くと大變な時間を要するから、それは別に改めてお話をすることとして、その大意を申す、始めの二句は世の中の物は何一つとして不變常住の物はない、總て刻々に變化するものである。と説き、次の二句はその生滅の物に執着する心を取り捨た所に眞に靜かな正しきゆつたりした楽しい世界が顯はれると云ふ意を示したものであります。私共が子供の時分から暗誦し、又年が寄つた今日でも、筆を執れば必ず書き來つてをるいろは四十八文字、あれは弘法大師が此の四句の偈文を説かれたものであります。是に就て詳しいお話をすると色々大切な事がありますが、それを説くとそれだけに二席も三席もの講話をしなければならぬで、ほんの大略のみを申すと、斯うである。

先づ始めのいろはにはほととの六字、之は色は匂へど散りぬるをである。わかよたれそつねならむは我世たれぞ常ならむであり、即ち今の偈文の始めの二句の意を人の身の上にあて、説かれたものである。香りの高い庭の花も年中咲きつゝかぬ、世の中は三日見ぬ間に櫻かなで散つて了ふと同様にお互も亦知らぬ間に變りはてた姿とも



なれば又花の散ると同様に死んで行かねばならぬ、此の世の中には何一つ變はらぬ常住の物はない、それを説かれたのが此の二句であります。それから次のうゐのおくやまけふこえては、有爲の奥山今日越えてで、此の有爲と云ふのは佛教の専門語で移り變る性質を示す言葉であり、世の中のあらゆる物は總てその性質は有爲で變化して止まぬものである。此の變化するものを萬劫末代變はらぬ物と誤解し、それに囚はれてをつた心掛けをさらりと捨てたのが今日越えてであります。さてさう越えてみると、そこに天空快瀾のひろくとした世界が現はれて来る、それがあさきゆめみしゑひもせずで、即ち浅き夢もみし酔ひもせずであり、變はる世界を變ると證れば、何んと變つても驚く事なくさながらに浅い夢を見たと同様の感じで善處し、それがために酒の酔ひが前後不覺の醜態を演ずるやうなことなく、泰然自若として世に處して行くと云ふのであります。尤も此の四句の偈文の意味は是位の浅い説明で盡きるものでなく、まだ深く深甚の幽意が含まれてあるのであります。私はたゞその一端を日頃の生活の上に移して解説したのに過ぎないのであります。それでも大體その意は諒解されましたこと、思ひます。私は此のいろは歌を口にする毎に、弘法大師が一般の人々に佛教の眞意を知らしめんがために如何に心を砕いて御考慮遊ばれたかを思ひ、その御化導に對して感謝の念が湧いて止まないものでありますと同時に、苟も此のいろはを口に又筆にする方には佛の教が泌み渡ると思ひ、限り無い欣びを抱くのであります。

所で、さうするとお寺の鐘の音もいろはと響くのか、そんな響きはせずたゞゴーン／＼と響くでは無いかと云はるゝ方があるかも知れませぬが、是は聞く方の心の持ち方でその音聲を聞く気分が違ふて来る、鐘の聲がいろはと申すのでは無い、ゴーンと鳴り響く時にかねての諸行無常の御化導を思ひ浮べ来るのであります。祇園精舎

の病人の比丘は臨終の床でその鐘の聲を聞くと、病苦の中に平常の御教化を思ひ浮べて如何にもさうだと大悟する意を説かれたものであります。皆さん方でも鐘の鳴るのを聞かれた時、思はず御念佛を唱へられませう。それと同様であると思はるゝと今申したやうな疑問は解消されます。

それから先程申した鐘の音聲を聞くと惡道に居る者がその苦を免れると云ふこと、それにつき志盤和尚は斯うした話をしてをられる。或る人が暴かに死んで地獄へ行つたが、それは誤りで嫡て娑婆へ還ることゝなつた。所が此の男は唐の先主が非常に苦しんでをられるのを見て、驚いてその故を尋ねると、先主は、自分は在世の時臣下に誤られて和州の降人千人を殺した。その冤を訴へられて今此の苦しみを受けてをる。所で此處に居ても鐘の聲を聞くと、その間は苦しみを免れる、就てはお前が娑婆へ還つたら我が後主に各寺院で成るべく鐘は緩かに撞くこと、尙更に一鐘を造るやう申入れて呉れと云はれた。男はそれは承知しましたが、併し何か證據物が無いと私が申上げて後主は信ぜられますまいと云ふと、それは有る、自分は在世の時に或る玉像を瓦官寺の佛像の左の膝へ香泥を塗つて隠しておいたで、それで檢べるやうに申せと云はる。男は蘇生しその事を後主へ申上ぐると後主は直ちにそれを檢べられると、果してそれが塗りこんであつたので大に驚き、大鐘を造つて金陵の清涼寺へ納められ、その鐘の銘に「烈祖孝高皇帝脫幽出厄」と鐫けられたと云ふことである。

それから又、道誠師は斯う云ふことを書遺されてをる。大莊嚴寺の智興師はいつも嚴肅に鐘を撞かれる、此の寺の或る僧の兄が時の天子の行幸に隨行して途中で死んだ。或る夜その妻に夢の告げをして云ふには、自分は途中の彭城で病死して地獄へ墮ちた。所が今月の始めに大莊嚴寺の智興師の打つ鐘の聲を聞き、一同は責め苦を免



れた、自分もその一人である。就ては汝は絹十疋を智興師に呈して御禮を申上げよと云ふた。妻は始めはそれを信じなかつたが、その中夫の死んだ通知があつたので非常に驚いて直ちに夢の告げの如く絹を持参して御禮を申すと、智興師は自分獨りでそれを受けずして他の方々へ頒つた。するとその中の一人がお前は何んな法を行つてさうし靈驗を顯すのかと尋ねた。智興師は自分は別に特別の行法はせぬ、たゞ阿含經に説かれた功德を堅く信じ日夜嚴重に鐘を撞くまでのことであると答へたと云ふことである。

斯うした物語は他にもあるが、それは略して、左様な大切な因縁のある鐘を何故に供出しなければならぬか、と云ふことを次席で詳しくお話し申すこととする。

### 後 席

大東亞戦争が始まつてから此方、戦局は時々刻々に進展し來り、今日の事が知れても明日はどうなるかと云ふことは殆ど判らなく成つた。私共は當初は長期戦であるから、さう近い中には大決戦はあるまい、殊に緒戦に於てハワイを始め馬來半島から南洋諸島に互つて赫々たる大戦果が擧げられ、米・英の兩國はその出端をコツビドク叩かれたため、容易に腰が立つまいと思つてをつた。尤も是は私共の如き何等軍事上の知識の無い者の見方である。専門家の方々、殊に事に當つて居られる陸海空軍の方々は熟慮深謀せられて、決して私共の如きあさはかな觀察をせられず、一刻も油断なく戦局の動きを觀めてそれに對する作戦を講じ、日々是れ決戦と云ふ態度で進まれてをることは申す迄も無いことであるが、私共の如き素人の目には今申したやうな觀め方をして、緒戦の大

戦果に酔つて米・英何物だ、今に兜を脱ぐに相違無いと思ふたのである。それに又新聞で讀んだ情報であるで、その當否は判らないが、亞米利加は十分に戦艦を建造し、その完備の上で一大決戦をするに云ふことが當初頻りに傳へられるので、多分左様であらう、さうすれば大決戦は一兩年の後だ、吾々はそれに對して十分銃後の御奉公を爲し、來るべき大決戦を勝ち抜くための用意をしなければならぬ、それが爲には如何なる苦難をも忍びて心身を捧けて御奉公申上げねばならぬ、と堅き覺悟を爲し來つてをつたのである。

所で敵は我が緒戦の大戦果に驚き、是では二年三年先の用意の出來上るのを俟つてをると手も足も出なく成ると感じ、當初の考へを變へて今直ちに一大決戦を試みんとしかけて來た。そしてそれが此の頃頻りに戦況が發表せられるソロモンの大海戦であり、此の大海戦は今尙繼續し來つてをり、敵は非常の大損害を蒙つてをるが、併し我が方にも戦艦を始め航空母艦なり飛行機なりが多數損傷を蒙つてをることを大本營から發表された。そののみならず敵は此の大海戦に新造の戦艦を使用してをつたことも判つた。それ故我が國に於ても急いで十二分の力を盡くして今後必要の武器の用意を爲さなければならぬこととなり、それがために最も必要な資材として梵鐘の供出と云ふこと、成つたのである。私は此の是迄に無い事の行はれるのは實に結構な事であると感佩してをる。何しろ一日でも速かにその用意を完成した方が戦局上に大變な利益を得ることは、私共の如き素人にでも能く諒解される。戦は相撲とちがい素手では出來ない、十分なる武器を要する、軍艦も飛行機も大砲も小銃も戦車も十二分に整備しなければならぬ。そしてそれに對して鐵なり銅なりは必須缺くべからざる重要な資材である。所で梵鐘は鐵と銅とを主要分として造られてあるから、直ちにそれを使用することが出來るのであり、こん



な重寶な物は他に類例すべき物が無いのであるから、私共はそれを供出して國家の御用に供するのである。お互の家庭から若い方々が應召されて戦地へ出かけると同様に、此の寺の鐘も亦應召されて聖戦完遂のための御用を勤むることゝなつたのであるで、私共は欣び勇んで鐘の應召兵を見送るために此度の前古に類例の無い嚴肅なる法會を開進してその行を盛んにせんとしたのが今日の法要であります。

此度全國の寺院から供出する梵鐘がどれだけの役目を勤めるかと云ふと、商工省の津田鑛産局長は斯うしたことを話された。全國の寺院の中梵鐘のある寺を約五萬五千と見積りて、その寺々から大小取混ぜ一個づゝを出すとして、その鐘の中に含まれたる銅を他の金屬を加へて再製すると、電車の架空線なら北海道から鹿児島まで二往復、普通線なら東京から支那の北京まで三十一往復の線が出来る。それから小銃弾なら十一億發、砲彈なら太小取混ぜて七百七十萬發、飛行機は五萬七十臺、一千噸の船なら千四百隻出来ること云ふ統計の話をしてをられる。此の外に私が他から聞いた話に、良い鐘には銅が七割から八割含まれてあるとのこと、又此度供出の梵鐘に含まれたる銅はいい銅山の一年間の産出額に匹敵することである。斯うした重寶なる資材が梵鐘として全國の寺々に保有されており、それが今直ちに御用に役立つことゝなつたと云ふことは、實に神佛の御加護であり又天佑とも申すべきであつて、此の一事を顧みても今度の大戦争は屹度我が國の大勝利に歸するものである、と云ふ思ひが胸に湧いて出るのであります。皆さん方も定めし私と同様の感じを爲さることゝ思ふのであります。是は少々話が横道に入りますけれども此際お聴きを仰ぎたいのは昨今行はれつゝある金屬回収のこと、此の金屬回収と梵鐘供出とは兄弟が揃うて出征するやうなものでありますから、之に就いても私の聞いたことを申添へ

ます。それは外でもありません、大體戦艦一隻の建造にはどれ程の鐵なり銅なりが入用であるかと云ふことに就いて、さる方が抽象的に計算したものに依ると、假りに三萬五千トン級の戦艦一隻の建造には、鐵二萬七千九百トン、銅九千九百九十九トンを必要とする。此の鐵の二萬七千九百九十九トンは鐵瓶で云ふなら假りに一個を五百七十匁として、一千三百五萬二千六百三十一個。銅の場合は火鉢一個を五百匁として、四十八萬五千二百八十個、二百匁の藥罐なら百二十九萬九千八百五十五個だけでよいのである。

斯う云ふと鐵瓶なり火鉢なりが大變の數を要することゝ成るが、併し又考へやうで容易にその數が揃へらるゝ。それは斯う數へる。北海道を除いた内地の全世帯數は昭和十年十月一日の國勢調査に依ると一千三百五十萬四千餘世帯と成つてをる、此の全世帯で各一個の鐵瓶を供出することに依つて三萬五千トンの戦艦が一隻出来る。又銅の方では同上の調査に依ると東京市の全世帯數は百二十八萬七千六百世帯と成つてをるで、一世帯から一個の藥罐を供出すると戦艦一隻の建造が出来ることゝなる。

又之を一千トンの商船一隻の建造に就てみると、鐵は七百七十六トン、銅は百四十五トンが必要である。之を同じく鐵瓶でみると三十六萬二千九百九十五個、銅の場合は火鉢なら七千七百三十四個、藥罐なら二萬七百十五個で事足るのである。

それから又屑鐵一千トンから鋼材は八百五十トン出来る。大型貨物船一總トンに要する鋼材、機械も含まれ、て、〇・六八五トンと推定されるで、八百五十トンの鋼材で一千二百四十トンの船が出来るのである。そうしてみると、鐵瓶一つが何んの役に立つとかと云ふやうな思ひ違ひをせず、之も梵鐘と同様に進んで供出しなければ



成りませぬ。

さて話を元へ戻しまして、今日は愈々此の寺の鐘の撞き納めと成り、再び此の鐘の音聲を聴くことは出来ぬこと、成るのであるで、私は鐘に對して心からお禮を申述べるのである。私共は三味線の音色を聴くと浮いた氣に成る。太鼓の囀子を聴くと踊りたい氣に成る。所で鐘の音聲を聴くとさうした氣分にならず、御法義の事が思ひ出されて知らず識らずお念佛が口に出る。たつた一聲の鐘の音聲が、私共を御法義のお座へ引寄せる大切な役目を勤めて下された、私共は是に依つて私共の信念を長い間養はれ來つたのである。それを思ふと今日此の鐘とお別れするに當つて、生きた人間に別れる時のやうな氣がして、先刻も鐘に向ふて、長い間私を引立て、下さつて有難うございました。とお禮を心の中で念じたことでありましたのみならず、此の最後の撞き納めの一撃を永久に心の奥底に刻み込んで、あゝ鐘が鳴つてをる油斷をしてはならぬ、と我れと我が心に毎日朝夕申し聴かさうと思つてをるのであります。

さて茲で改めて申上げたいことは、斯うして梵鐘まで供出せねばならぬと云ふと、何んだか我が國が戰時資材の不足で、是から先きはどうか、と云ふ不安の念を抱かれる方があるかも知れませぬが、若しさうした心配を抱かれる方があつたら、それは少しも心配なさるに及ばぬことであります。我が國にはさうした資材は十二分に在る。殊に日滿華の三國が渾然一體となつて立ち上つた今日、それに馬來及び南洋の諸島が我が勢力下に入り來つた今日では、あらゆる資源が思ひの儘に使用することが出来るのである。唯今日はそれを利用する準備が出來兼ねてをると云ふ状態であり、その過渡期の不足を補ふために斯うした應急の處置が執られるまでのことであ

り、今後は歲月が経てば經つ程有利の地位に立ち、長期戰に對する十二分の實力が完備せらるゝのでありますから、私共は大安心してをつてよいのである、と私は信するのである。

今更申す迄も無く今次の大戰爭は國を賭しての深刻なる戦ひとなつた。敵亞米利加は我が國を此の地球上から抹殺してしまふまで戦はんと豪語してをる。私共はそんな恫喝には何等驚きはしないが、併し斷じて油斷は出來無い、お互に本眞劍に成つて各自の戦域に於て懸命の御奉公を爲さなければならぬ。それに就いても染々と思ふ事は、お互は今日只今の考へ方で宜いであらうか。私は總ての方がさうだとは申さないが、多くの人の中には此の大切な戦時下に在るにも拘らず、自分獨りの事のみを考へて何んだ彼だと不足を訴へる方がまゝある。私はさうした方は國家の事よりも我が身の事のみを考へてをる、實に淋しい心掛けの方であると遺憾に思はれて成らぬのである。私共は釋尊が「家に事ある時は我が身を忘れ、市に事ある時は我が身と我が家を忘れ、國に事ある時は一切を忘れて國家のために盡くせ」との教示を蒙つてをる。殊に宗祖聖人は「朝家の御ため國民のために念佛せよ」と厳誡なされてるのでありますから、お互佛教徒たる者、殊に眞宗教徒たる者は、如來聖人の慈訓を感佩して、かね／＼申上げ來つてをる「報恩の至誠を以て國家に盡す」との我が宗風を日常の動作の上に實現しなければならぬ。私は今日はそれを實現するに當つて絶好の機會であると確信するがために殊に、此の事を申上げて皆さん方の奮起せられんことを熱望するのであります。

若い方々が身命を捧げて征途にのほらるゝ今日、各寺の梵鐘殊に私共の寺の梵鐘もその供出を遅れては成らぬと奮ひ立つたのである、是に對して「朝家の御ため國民のために念佛せよ」又「如來大悲の恩徳は、身を粉にして



も報すべし、師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし」と垂誠し給へる宗祖聖人は、此の壯學を定めし御満足し給ふこと、拜察するのでありますで、皆さん方もどうか御安心なさつて此の壯學を衷心より祝福されんことをお願い申します。

皆さん、梵鐘さへ御覽の通り赤繩を掛けて勇んで出かけるのであります。是を觀めては私共は靜としてをられぬ。今只今から心身を捧けて御奉公申上げる意氣を一層引立てねばなりません、それが取りも直さず報恩の大道であります。どうかその氣に成つて今日の法要を最も意義あらしめられんことをお望み申上げます。

(昭和十八年初春)

梵鐘文獻談完

昭和十八年十月二十日印刷  
 昭和十八年十月三十日發行

非賣品

編輯者 岩見護  
 京都市下京區常葉町  
 眞宗大谷派宗務所内教化研究院

發行者 清水洪  
 京都市下京區常葉町  
 眞宗大谷派宗務所内

印刷者 宮崎勇治  
 京都市下京區西洞院七條南入  
 内外出版印刷株式會社

發行所 大谷出版協會  
 京都市下京區常葉町  
 眞宗大谷派宗務所内

441  
142



終

